

鹿毛皮の利用状況の調査及び家具への活用

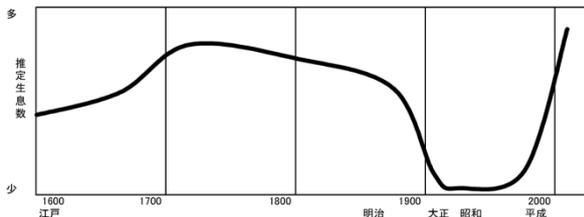
森と木のクリエイター科 木工専攻 ベケットリンド

1. 研究背景と目的

日本の森林管理において、鹿やイノシシなどの野生動物の個体数調整（捕獲）は不可欠な要素です。鹿が増えすぎると餌不足により樹皮や若木が食べられ森林に深刻な被害をもたらすからです。

大正末期には鹿の減少に伴い「保護政策」がとられました。1990年代後半からの急激な個体数増加を受け、現在は森林を守るための「捕獲・管理」へと方針が転換されています。

しかし、年間約74万頭ものニホンジカが捕獲されているにもかかわらず、市販の食肉として利用されているのは約10%、革に至ってはほとんど活用されていません。これは、オーストラリアで環境管理の一環として同じようにカンガルーを駆除しながらも、その肉や皮を資源として当たり前利用しているオーストラリアとは対照的です。さらに、カンガルーは野生の鹿と同様に自然界では放し飼いで飼育されています。食肉用に飼育されている動物と比べると、動物福祉に関する倫理的な懸念はそれほど高くありません。



江戸期から現在までのシカ推定生息数の変遷模式図⁽¹⁾

日本における鹿革利用の歴史と現代の状況を比較し、本来廃棄されるはずだった鹿革を使って、現代の生活に合う新しい製品をデザインします。

2. 研究内容と実践

2-1. 日本人と鹿革の記憶

日本では古くから鹿革が利用されてきました。侍の鎧（よろい）や剣道の防具、アイヌ民族の衣装など、歴史的な道具や衣服にも多く使われています。



北海道の鹿の毛皮で作られた
アイヌの衣服（ユクウル）⁽²⁾

その理由は、鹿革の持つ機能性にあります。柔らかくて丈夫、通気性に優れ、水にも強い。そして何より、独特の「しっとり」とした触り心地は、手袋や和装小物に最です。

残念ながら、現代の日本の市場ではほとんど流通しておらず、消費者が手に取る機会は失われています。しかし、鹿革の持つこうした利点は、家具製作において非常に適していると思っています。



韋所総鹿革の鎧兜⁽³⁾

検索してみると、鹿の毛皮で家具を製作している方は少数けれども多くの職人はアクセサリーやカバンなどの小物を作っています。そこで、鹿革を使う愛知県の職人と猟師活動をする木工専攻の卒業生にヒアリングをしました。

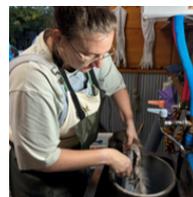
2-2. 皮から革へ（なめし工程）

製作者として、素材に対する理解と敬意を深めるために、自らの手でその方法を学びたいと考えました。

通常の狩猟期間は冬（11/15～2/15）ですが、今回は有害鳥獣駆除として10月に捕獲されたメスの鹿皮を、林業専攻の先生から譲り受けました。ちょうど夏毛から冬毛への「生え変わり」の時期だったため、独特の模様と手触りが残っています。

一般的な皮革製品には「クロム」が使われますが、鞣し液を廃棄時の環境負荷が課題です。一方、ミョウバンは漬物の色止めなど食品にも使われる安全な素材です。今回は環境に優しいこの方法を選びました。

皮が完全に乾ききる前に、手で少しずつ引っ張りながら繊維を伸ばしていきます。



2-3. 家具の設計と製作

先生の指導や専門書を参考に、鹿毛皮の座面を持つシンプルなスツールを設計しました。木部には「ナラ」を選びました。ナラの持つ自然な色合いは鹿の毛皮と非常に相性が良く、家具に適した十分な強度も持っているからです。



日本の鹿皮と国産木材が美しく機能的な家具を使うことで、日々の生活の中で「森とのつながり」を感じてほしい。そして、このツールが日本の森林管理の重要性を知るきっかけになることを願っています。

鹿の毛皮のような天然素材を使用する際の難しさが一つ浮き彫りになりました。布地や牛のような大型動物の皮とは異なり、使用できる皮の量は少ないです。裂け目や傷があると、家具として使用できなくなる可能性があるため、小さなアイテムを作ったり、パッチワークのように縫い合わせたりする戦略が不可欠です。さらに、毛皮の職人から聞いたアドバイスは鹿の冬毛は密度が高いが、毛が中空で割れやすい。つまり、手に入りづらいのにも関わらず、クッションを作るためには夏毛を使用する方がいいのです。

客観的な評価のために「しし森社中」の毛皮職人の方に、皮の使い方について評価やアドバイスをもらいたいと思います。

3. 調査アンケート



捕獲に対する現代の意識と知識を測るために、展示会で課題研究の背景や流れに関するポスターと鹿毛皮ツールを展示し、アンケートも設置しました。展示会を見た人のうち、14人がアンケートを記入しました。

参加者には、基本的な人口統計、森林で獣害と駆除された野生動物の皮の廃棄の問題を認識しているかどうか、また鹿毛皮のツールについての印象について質問されました。

最も興味深い結果は、参加者が獣害の問題を認識していたとしても、ほとんどの人が皮が使用されるのではなく廃棄されていることに気づいていなかったことです。

ですが、展示を見る前と比べて、野生動物の革製品に対するイメージは7割に良くなって変わりました。さらに、鹿毛皮のツールに対する印象は圧倒的に肯定的で、最もよく聞かれた返事の一つは、毛皮の柔らかさと暖かさに驚いたというものでした。

4. 結論

【現在の記憶】 鹿毛皮を使った製品への関心の高さは大変喜ばしいことで

す。そして、人々が素材との繋がりを実感できるサンプルを提供することは重要です。

これらの製品をマーケティングする上で最難関となるのは、従来の家具のクッション材と比較して、持続可能性と倫理的な選択に関する啓発活動を行う必要があるかもしれません。この点については、展示会では明確に説明しませんでした。

【商業的実現可能性と魅力】 日本国内でも、これはまだ非常にニッチな市場であり、輸出/関税の制限や文化的な配慮により、海外への拡大は難しい可能性があると思います。

原材料は高価ではありませんが、鞣し工程に時間かかるので生産費用と共に製品の値段が増加します。現時点では今回が初めての鹿毛皮製品の製作で私の経験不足もありますので、時間が経つにつれて軽減されることが期待されます。全体的に鹿毛皮の家具はより高価な製品となるため、高品質を期待する顧客に販売する必要があると思います。

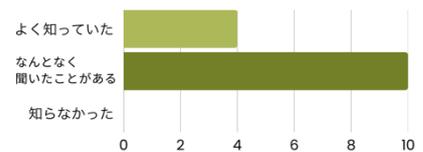
5. これから

卒業後は野生動物の毛皮に携わり、技術を磨き、持続可能な素材としての毛皮の利用を推進していきたいと思っています。地域の森林組合を通して、猟師の方々と繋がりを持ちたいと思っています。

引用画像

- (1) 小山泰弘・岡田充弘・山内仁人 (2010). ニホンジカの食害による森林被害の実態と防除技術の開発
<https://www.pref.nagano.lg.jp/ringyosogo/seika/kenkyu/ikuri/documents/iku-24-1.pdf>
- (2) 民族共生象徴空間(2021) <https://www.instagram.com/p/CWfKCM5NfWD>
- (3) 人形処橋本屋 <https://www.oningyo.com/list/sousikagawa.html>

日本の森林における「獣害」の問題を知っていましたか？



駆除された鹿の「皮」の廃棄されている現状を知っていましたか？

